

資源開発に揺れる グリーンランド

―氷床の融解がもたらすもの―

北海道大学
スラブ研究センター
学振特別研究員

高橋 美野梨

●たかはし・みのり 1982年生まれ。立命館大学卒業。デンマーク政府給費奨学生などを経て、筑波大学大学院人文社会科学研究所一貫制博士課程修了。博士（国際政治経済学）。博士論文が明石書店から今冬刊行予定。

グリーンランド（デンマーク自治領）は、一九七九年に極北先住民社会において初めて内政自治権を獲得した島として知られている。その極北の島がいま、記録的な速さで進む氷床の融解と、それによって高まる地下資源開発の可能性との間で揺れている。



世界最大の島が歩んできた道

北米大陸に近く北大西洋に浮かぶ世界最大の島であるデンマーク領グリーンランドは、一七二一年、宣教師ハンス・エーゲデを中心とする遠征隊によって交易の基地が建設されたことで、実質的にデンマークの植

民地となった。二百年強の植民地を経て一九五三年にはデンマークへと統合され、デンマークの一地方と同格の地位を獲得した。デンマークへの統合は、デンマークの他の地域とグリーンランドを同位に位置付けることを意味していたことからデンマーク化過程（＝本土並みの近代化過程）と呼ばれた。グリーンランドは、同過程を通じて学校教育や医療の普及等、法制度・実質の両面においてデンマークの一地方への道を歩むこととなった。

デンマーク化が推し進められる中で、一九七〇年に開始されたEC（欧州共同体）加盟交渉、七三年のEC加盟を契機としてグリーンランドでは、モーセス・オールセン、ラース・イミール・ヨハンセン、そしてヨ

ナツァン・モッツフェルトというデンマークで教育を受けた新世代（一九三〇年代以降の生まれ）の政治家たちを中心として、「新しい政治」を見出していこうとする動きが顕在化した。彼らは一九七七年七月に結党された民主社会主義政党シウムット党の主軸となる人物であるが、そこで目指されたのは政治経済の両面でグリーンランドの自己決定権を高めることであった。当該時期のグリーンランドは、シウムット党だけではなく、デンマークとの連帯を党是とするアタスット党、極北先住民連帯を志向する左派・イヌイト同盟党が結党されており、住民の声が系統だつて表出される土壌が形成されつつあった。

シウムット党を中心とする自治権獲得キャンペーン、



グリーンランド（デンマーク自治領）
面積：2,175,600km²（日本の約6倍）
人口：56,370人
首都：ヌーク
元首：アレカ・ハモン自治政府首相
政治：議院内閣制（1院制）
宗教：キリスト教（福音ルーテル派）
民族：イヌイト系88%
イヌイトとデンマーク系の混血など
言語：グリーンランド語（公用語）、デンマーク語
通貨：デンマーククローネ
GNI（1人当たり）：20億4446万ドル
（3万6281ドル）

デンマークとの交渉、グリーンランドにおける住民投票を経て、グリーンランドは一九七九年に極北先住民社会において初めてとなる内政自治の権限を獲得した。この権限を行使して二〇〇三年には防衛・安全保障分野における独自の発言権を獲得し、デンマークに属しつつ当該分野においても一定の権限を有する主体となった。今日のグリーンランドは、二〇〇九年に法制化された自立法の規定に即し、域内資源の所有権獲得やグリーンランド語の公用語化等の規定に加え、（デンマークとの交渉を開始できる権限としての）独立権をも獲得する自立的な主体となっている。

留意すべきは、グリーンランドの自治が、常にデンマークとの依存関係を前提に求められてきたという点にあった。それは、国民総生産の四割がデンマークからの支援金で賄われているという経済依存だけを意味しているのではない。自治要求の契機、権限・権力分のプロセスに目を移してみても、グリーンランドはデンマークに自発的に依存しつつ自治権を欲してきた。長らく自治政府において自治問題を担当してきたミンングアック・クライストは、グリーンランドの自治は何よりもまずデンマーク国家という法体系を構成する